

エッセイ

直し直される原田さん

最首 悟

和光大学名誉教授

原田さんは1934年9月14日生まれである。わたしは1936年9月14日に生まれた。戦前は誕生日を意識することは少なかった。しかしやはり生まれた日に何が起こったか、何が起こるかについては関心があった。それで原田さんに聞こうと思いながらついに機会を逸したことに、橋田邦彦の自殺がある。橋田邦彦は1945年9月14日、戦争犯罪人としてGHQに出頭を求められて、服毒自殺した。東条英機内閣、近衛文麿内閣の文部大臣をつとめた。東大医学部教授、電気生理学の草分けであり、道元研究でも知られる。その前日には厚生大臣で陸軍軍医中将の小泉親彦が割腹自殺した。陸軍軍医中将と言え、軍医大将という位階がないことに不満でよけい励んだと言われる七三一部隊長の石井四郎がいる。文官で自殺したのは橋田がはじめてで、ついで12月に近衛文麿が自殺した。東大医学部教授としては、原爆調査に赴き、海軍軍医少将であるゆえをもって追放された外科の都築正男がいる。ちなみにわたしの父は1949年肺結核で失敗覚悟の左肺下葉摘出手術を外科の神様と言われた都築正男の執刀によって受け、失敗して死んだ。

原田さんは軍医を父にもち、東大でインターンをしているし、国家を背負う医師（そういう医師を国手という）を相手に闘いつづけた。東大で言えば、何と言っても日本医学界の超大ボスで有機水銀説をうやむやにさせた田宮猛雄、そして水俣病認定該当者をほとんどなくす認定審査基準をつくった椿忠雄、認定審査会を牛耳る井形昭弘が挙げられるが、国家あつての国民、全体あつての個人という考えを哲学者をはじめとして学者・専門家がどのように抱くようになるのか、その好例としての橋田邦彦に、原田さんはきっと関心をもっていたにちがいない、と思ってきたのである。

原田さんの本で、専門家に焦点を合わせたものに『裁かれるのは誰か』（世織書房、1995年）がある。腰巻にわたしの惹句「専門家とは体制の隠れミノか？ 高度技術管理社会とは、たえず技術革新を行い、たえず守るべきルールが増えていく社会である。この社会を維持するには膨大な官僚を必要とする。官僚は専門家を操作し、専門家を隠れみのにして、社会、民衆を管理する。操作される専門家とは何か。その実像を水俣病は鏡のごとく映し出す」が刷ってある。原田さんは『慢性水俣病・何が病像論なのか』（実教出版、1994年）を出されたあと、「水俣病に関していうなら当分書くことがないように思われた。ところが最首悟さんから『水俣病における専門家の責任』みたいな点について書いたらという助言を受けて動き出した」（245頁）とあとがきで書かれた。原田さんは心遣いの人であった。

原田さんに最後にお会いしたのは2011年12月の熊本学園大の水俣学講義のときであったが、時間がなくご挨拶程度であった。それで、いろいろなお話が個人的に伺えたのは、2008年8月の理科教育ミニ教研in水俣が最後になった。この教研は原子力資料情報室の山口幸夫さんがキーパーソンになって、少人数ではあるが全国の心ある理科教師が年にいっぺん手弁当で集まってくる研究集会で、もうじき20回を数える。水俣での研究集会では原田さんに特別講演をお願いし、その晩は一緒に部屋に泊まって、いろいろお話を伺った。佐久病院で食道がんの手術を受けられたのだが、気を許すと食道壁が癒着してしまう、それをはがす、という話はこちらがひりひり痛んでくるようで、いくら気丈でもたいへんつらい経験をされたのである。最初の胃腸切除のあと焼酎で消毒しているからとあつけらかんと言われて、それはお元気だったが、この2008年の夏はさすがに酒量は落ちて、しかしそれでも私たちの飲み会につきあって下さった。それが原田さんだった。

部屋に引き上げての話で、原田さんはあまり医者としては言えないのだけどと前置きして、上村智子さんの家に行く必要ということを相当しみじみと吐露された。不治の病と告げ、その患者を診続けていくことは心が折れそうな仕事である。もちろん心が折れそうなのは当の患者であるのだが、その患者を支える医師のつらさというのも底知れぬものがあるのだ。もちろん智子さんの家に行くことは文章に書かれていてもいて、例えば『一九六〇年代 未来へつづく思想』（岩波書店、2011年）では「この家はほんとうに貧しかった。部屋は二部屋しかなくて、玄関を開けたらいちばん向こうの端まで見えるような家でした。しかも、智子さんは重症です。私の心は重たくなって当然なのに、ところがその家に行くとなぜかくつろげた」（112頁）とある。

2008年夏の夜は、一歩踏み込んで医者が患者として、患者であるお医者のもとにゆくという文脈だった。智子さんがあるいは智子さんの母親が、あるいは智子さんの家が、原田さんにとってのお医者なのであった。

ハワード・ブローディによれば、プラシーボ（偽薬）を使わないプラシーボ反応というのがあって、心のあり方が、体内の未知の製薬工場に働きかけて万能薬ともいうべき化学物質を産生して、諸症状を軽くする（『プラシーボの治癒力 心がつくる体内万能薬』伊藤はるみ訳、日本教文社、2004年）。その心は次の3つの組み合わせのとき、活性化する可能性が高いとする。

①治療者や周囲の人々からの思いやりといたわりを感じる。②病気についてよく理解できる説明を受け、それに耳をかたむける。③病気やその症状を把握し、自分が主導権をもっているという気持ちが高まること。

さらには「そばにいること」だけでプラシーボ反応が起こる。それはすでに内科医の古来からの掟として、万策尽きた後、医師が「治療と化す」（ウォルシュ・マクダーモット）と言われた、その内容でもある。わたしは「そばに居ることから」（鎌田慧編著『人権読本』岩波ジュニア新書、2001年）という文章を書いたことがあるのだが、そこからグリーンケアとしての「押しかけシットイン」（社会思想史学会セッション、2011年）と言ったことがある。

「押しかけ」には2つあって、困っている方が押しかける場合がある。原田さんの場合はこのケースである。

土本さんの映画『不知火海』、海辺で加賀田清子さんが原田さんに話しかけている。何も感じない、脳を手術したら直るだろうか。原田さんは困る。もちろん清子さんは困っている。そして途切れ途切れの会話のなかで、2人ともお互いに何かが起こっていることに、観る方は気づく。たぶんそれもプラシーボ反応なのだ。杉本栄子さんは「水俣病になってよかった」と言われた。心のあり方が起こすプラシーボ反応に数えられるが、それは周りの人あつてのこと、そのなかにあつて原田さんは重要な一人だったと思われる。原田さんは「よき耳」(トロッター)をもつ医者だった。そのことが胎児性水俣病の発見をもたらした。

わたしは、ありていに言えば、水俣に学問研究というものの切り口を探しに行ったのである。五里霧中の出口を探していたのだ。結局は出口なしでそれが学問と思って問学と称するようになるのだが、その鳥羽口で、原田さんは見かねて、日記をつけている漁師さんがいますよと言って下さった。女島の井川太二さん、御所浦の森千代喜さん。それが私の仕事になった。

(『季刊 水俣支援 東京ニュース』2012年10月25日、No.63より転載)



図1 水俣フォーラム評議会にて。手前右から最首、原田、石牟礼
(開催日：2004年10月3日、会場：日本都市センター)

出典：認定NPO法人 水俣フォーラム提供